巡回ワークショップ　@高知・四万十町興津地区

むすび塾

手助け 地域ぐるみで

要援護者の避難

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かしてもらおうと、河北新報社は2月3日、巡回ワークショップ「むすび塾」を高知県四万十町の興津地区で開いた。東北以外での開催は2回目。減災・復興支援機構（東京）の木村俊雄理事長が進行役を務め、地区の住民6人が要援護者の避難、地域の孤立といった課題を話し合った。震災で被災した石巻市の石巻めつぼ幼稚園長の津田小明さん(73)と、石巻地区消防本部警防課主査の野田和好さん(43)も「講師部」として議論に加わった。

南海トラフの巨大地震　津波の高さは最大25㍍以上で、興津地区は津波の第1波が短時間で到達し、1㍍以上浸水し、お年寄りや障害者が避難する際、どう支援するかを具体的に決めている参加者が多かった。

自分も補聴器を使う小嶋光紀さん(63)は「避難訓練に参加しない人に対し、意識啓発を促し続けるべきだ」との指摘も出た。

むすび塾では高知県四万十町興津地区の住民が避難の課題について話し合った。1本の細い林道が地区と外を結ぶ唯一の交通路。津波に備え、避難タワーは3カ所に整備されている

山と海に囲まれた高知県四万十町興津地区

高齢者5割 巨大津波懸念

高知県四万十町の興津地区は、高知市から南西約50㌔に位置し、土佐湾に面している。約250世帯の約1000人が暮らし、高齢化率は約5割に上る。

想定される南海トラフの巨大地震では最悪の場合、25㍍以上の津波が予想され、地区の大半が水没する。国道を山に囲まれ、峠を越える道路が地域外に通じる唯一の道になるため、岸壁ばかりでなく、山からも孤立する。

地震・津波対策として、避難タワー、避難広場、緊急用ヘリポートなど施設の整備が進む。地区は高台に移転した保育所とデイサービスセンターを防災拠点に位置付け、コメや毛布を備蓄するほか、プールの水を浄化する装置を設置した。

半面、予想される津波が、地区の道路は狭く、ブロック塀が並び、車で搬送しても通行できない恐れがある。人的支援対策と道路拡幅などのハード対策を同時に進めてほしい。

「短い時間では逃げられない」と諦めているお年寄りも、京大防災研究所（個別避難計画）を施行し、高齢者と一緒に最寄りの避難場所に移動する。避難の様子をビデオカメラで撮影したり、気付いたことをメモしたりし、避難の一動画カルテ」を作成している。

地区では高台移転した保育所にコメなどを備蓄している。備蓄の状況や孫を車で迎えに行くと渋滞が起きる恐れがある。家族それぞれの避難場所を事前に決める原則を確認した。

野田さんは消防署員の星に誘われた後、津波に流された経験から「避難ビルやタワーは最後の逃げ場所。できるだけ高台を目指した方がいい」とアドバイスした。

地震後、津波による広範囲の水没と交通路の寸断により、地区が孤立することを心配する参加者は多かった。都市部と比べ、電気や水道の復旧も遅れる可能性は高い。

地震後は電話がつながっても、保育所にコメなどを備蓄していない、参加者も詳しく知らない参加者もいて、自主防災会の役員が、備えの意識の甘さを指摘する場面もあった。

木村理事長は「1週間分を目安に非常用の食料や水を準備の義務化に保管しておいてもらうなど、家族単位でも可能な限り備えておくことが重要だ」と提案した。

震災発生当日、幼稚園の園長・津田さんは「震災が夜間に起きていたら、停電で真っ暗な上に寒さも厳しくなり、よりより大変な状況になっていただろう」と話した。

■むすび塾に参加して――高知・四万十町興津地区

【参加して】消防団に入っている。津波避難タワーなどの整備は進むが、心配は拭い切れない。高齢者の避難や避難後の生活など課題は山積みで、地域の協力を得ながら解決策を探りたい。
―農業・伴一内珠喜さん(43)

【心配なこと】地震時は近所のお年寄りら1軒を掛けて逃げるつもりだが、住宅が密集して車一台通れない路地もある。ブロック塀や古い空き家の倒壊、瓦の落下が不安だ。
―農業・縄本真知子さん(49)

【震災の教訓】昼間の発生でもあれだけの被害が出た。津波は来ないといった甘い込みもあったのだろうが、夜間に発生していたら犠牲者はさらに増えていたのではないだろうか。
―町委託職員・小嶋光和さん(63)

【避難に向けて】建設会社に勤務している。地震後の道路の復旧には重機が必要だ。重機と燃料の保管場所は低地にある。避難訓練などを通じて地域との連携を深め、災害時には移動させたい。
―会社員・浜崎康子さん(39)

〝自力〟の住民増やそう

■専門家から　京大防災研究所教授（防災心理学）　矢守　克也さん

高齢者がほぼ半数を占める興津地区で「津波災害時にお年寄りや障害者の避難を助けたい」という住民の声は切実に伝わってきた。地区の道路は狭い上にブロック塀が並び、車で搬送しても通行できない恐れがある。人的支援対策と道路拡幅などのハード対策を同時に進めてほしい。

「短い時間では逃げられない」と諦めているお年寄りも、京大防災研究所（個別避難計画）を施行し、高齢者と一緒に最寄りの避難場所に移動する。避難の様子をビデオカメラで撮影したり、気付いたことをメモしたりし、避難の一動画カルテ」を作成している。

避難者が自助が必要な住民を絞り込めば、要援護者の問題はぐっと軽くなる。避難支援の対策が難しい場合は、自宅の高台移転や施設入所ができるよう行政も選択肢を用意してほしい。

と興津小の子どもたちが取り組む個別避難訓練に参加してもらうと「思ったより体が動いた」と自分に避難する力があることに気付く。地域ぐるみで自力避難できる人を増やそう。

避難に介助が必要な住民を絞り込めば、要援護者の問題はぐっと軽くなる。避難支援の対策が難しい場合は、自宅の高台移転や施設入所ができるよう行政も選択肢を用意してほしい。